

令和元年度 信州の食を育む県民会議

日 時 令和2年2月6日（木）

午後2時から午後4時まで

場 所 長野県長野保健福祉事務所 3階会議室

1 開 会

2 あいさつ

○宮澤副会長

皆さんこんにちは。この2020年は平和の祭典として、世界からアスリートをはじめとする多くの皆さんが日本を訪れ、日本が国際的にどのような位置づけになっていくのかという、大きな幕開けの年となってまいります。

ご承知の通り、文部科学省では小学1年生から中学3年生までの各児童・生徒にパソコンを1台ずつ供与するということを決定されました。まさにITを基軸として、世界が一つにまとまってくる。もちろん今回のコロナウイルスのように、中国の1地域で起こったウイルスが世界を駆けるような状況にもこれからなってくるわけですが、さまざまな問題が日本国内だけで処理されていく、そんな時代から大きく変わろうとしているという予感を長野県もしっかりと基軸に置かなければいけないと思うところです。

そういう中で、長野県の最大の課題は子ども達が少なくなっているということで、本当に子どもは宝物であります。そういう子ども達に日本の失ってはならないもの、残さなければならぬものをどのように伝えればよいかということや、また反対に、国際的な地域から来た人たちにも日本というコミュニティを理解していただかなければならない、ということをお本会議の会長である阿部知事とよく話をします。

私は昨年暮れ、中国の3,800万人の黒竜江省へお邪魔しました。黒竜江省というのはハルピンや牡丹江等々、長野県の多くの人たちが満州開拓に行かれた地です。今は中国を代表する穀倉地帯で、まさに中国の胃袋を構成するのが黒竜江省だということです。その黒竜江省の中に、日本人が残した食文化が生きており、私は驚かされました。日本が誇る食文化はやはり世界に誇れるものなのだと改めて感じました。

小泉内閣のときに総理が中心になって、これから日本が残さなければならぬものは食育にあるということで食育基本法ができました。

それから長野県も平成26年に第9回全国推進食育大会を開催した際に、信州ACEプロジェクトのキックオフを、知事と開催地である加藤長野市長と私の3人でさせていただきました。知事は食育や信州ACEプロジェクトをしっかり進めていかなければいけないと話されております。

今日お集まりいただいたのは長野県の食育を先頭に立って進めていらっしゃる方々ばかりです。今日は皆さんと有意義な時間をもって、長寿県である長野県の食育をもう一度見直す機会にさせていただければと思います。

2020年は大きく時代が変わり、日本が世界に発信する時代です。そのときに長野県から発信する大きなツールのひとつに食育がなっていければと思います。

日ごろの皆さん方の大変なご尽力に対して心から敬意を申し上げますと同時に、今日は過去に出されたいろいろな課題をひとつひとつ突き詰めていく中で、結論を導いていただくことを心から念じまして、知事に代わりましてのごあいさつと、また進行役を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

3 会議事項

(1) 長野県食育推進計画（第3次）の進捗状況について **資料1**

事務局説明

○宮澤副会長

この点につきましては重要な問題でございますので、今のご説明に対してご意見、ご質問等ございましたらご発言いただきたいと思いますと思いますが、いかがでしょうか。

○中村委員（長野県歯科医師会）

私どもは医療職ですので、長野県食育推進計画においては、世界一の健康長寿を目指す食育、こちらのほうに非常にかかわりが大きいと思っています。

先ほどのご説明の中で、いわゆる低栄養の傾向の高齢者の割合という部分がございます。この年齢区分に関してですが、65歳以上という年齢区分で判定されております。いわゆるメタボリックシンドロームというものに関しては、過栄養などの問題があるわけですが、それがある程度高齢者になってくると、低栄養という問題が出てきます。

そのため65歳以上というくくりの中では、その基準がなかなか難しいと思います。今後の検討になるかと思いますが、高齢者と元気高齢者と要介護の高齢者という区分での評価も、今後はおそらく必要になるのではないかと思います。

○宮澤副会長

とても大事なところですが、どうですか。

○事務局（健康増進課）

特定健診・特定保健指導ということで、40歳から74歳までの方のメタボリックシンドロームに関する取組を平成20年から続けてきております。一方で、近年は高齢者のBMIが低すぎる方、特に女性においてそういう課題があるということで、一概に年齢では区切り

にくいということもあります。

また、高齢者には持病があったりすると、その持病も含めて食に関する指導をしていかなければならないという課題もあると認識しています。

いずれにしても太っているだけがいけないということではなくて、やせすぎもいけませんということを、うまく県民に伝えていくということが今後の課題だと考えております。

○宮澤副会長

65歳が本当に高齢者といえるかは、今、社会的なテーマになっています。このくり方についても検討する中で、新たな部分をどのように生かしていくかということをぜひともご検討していただきたいと思います。

国がどうのこうのではなくて、長野県はトップを走るわけですから、トップを走る自覚をもってぜひともご検討いただきたいと思います。

ほかにはいかがでしょうか。どうぞ廣田委員。

○廣田委員（長野県栄養士会）

3ページの若い世代の食育のところにございます、下から2つ目、③の市町村食育推進計画の策定割合ですが、この54市町村は健康増進計画に合わせて策定しているところも含めてこの数字なのか、3つ増えたところの状況というのがどのような感じか、もしわかれば教えていただきたいと思いました。

○宮澤副会長

食育というのは、健康づくりや農業振興等、様々な分野が関わっています。出先の保健所や振興局の農政課からも働きかけを進めていっていただきたい。そうしないと、残りの20数市町村まで策定するということはなかなか難しいと思います。町村会が上からポンと出して出せば、同じようなものは出来るかもしれませんが、その市町村ごとの味が出るものはなかなか難しいと思いますので、その辺りも踏まえて考えていただきたいと思います。

先ほどの廣田委員のご質問に対していかがでしょうか。

○事務局（健康増進課）

食育推進計画と健康増進計画は一体的に作成をされている市町村が22ございます。残りは単独ということでございます。新たに計画を策定された市町村は、御代田町、南木曾町、栄村の3町村でございます。

○宮澤副会長

こちらで少し付け加えさせていただきましたが、県の立場からも、ぜひともまたよろしくお願いを申し上げます。

○事務局（農産物マーケティング室）

学校給食等を通じて県産食材を使っていたかく、これが非常に重要なことだと思っております。

本日も市内で農産物の直売所の研修会を並行して開催しています。物流をうまく使って、学校給食へ届けるということ、ひとつ課題として取り組んでいます。

本日、調理師会の湯本会長にもお越しいただいていますが、調理師会にご協力いただき、学校給食で県産食材をいかに手軽に使っていただくか、献立の提案も含めて、農政部でも取り組んでおります。このような観点も含めて、市町村にも進めてまいりたいと思いますのでご協力をお願いいたします。

○宮澤副会長

あと20数市町村ありますので、県としても少し力を入れていただければと思います。

○中村委員（長野県歯科医師会）

高齢者の食の問題ということに関してですが、やはり今フレイルということで、いわゆる身体的なフレイル、ソーシャル的なフレイルというものがあります。独居の高齢者ですと食の環境というものに関して、影響が大きいと思っております。

私も実際、歯科の訪問医療で在宅の診療を行っていますが、食環境の重要性を非常に認識します。この調査の中で、高齢者の食環境に関して、家族と一緒に食事ができているのか、あるいは常に孤食であるとか、そういった環境に関する調査というものも非常に大事になってくるんじゃないかと思っております。

ぜひそういった調査に関しましてもご検討いただければと思っております。

○事務局（健康増進課）

大変重要なご指摘だと思います。配食サービスに頼ってらっしゃる方やそういった孤食の方がいる状況があると思いますので、そういった方の実情を踏まえて、食の問題を検討していく必要があるかと思えます。こういった視点を大事に取り組んでまいりたいと思います。

○宮澤副会長

朝食を一人で食べている15歳以下の子どもが約58%となっています。この問題をどう改善していくかは、健康福祉部の問題だけではなく、ここにいらっしゃる皆さん方の課がどうとらえていくかということが、大きな課題であります。

横の連携を取り、教育現場との話し合いを深めていかないと解決出来ない話でもあるので、ぜひともこの率をなるべく低くするよう、働き方改革の働き方においては、産業労働部とも話をしなければならない部分だと思っております。

家庭での孤食（個食）一つとっても非常に大きな裾野がある分野だということを、ここでももう一度自覚しながら、前に進めさせていただければと願うところでございます。

○大星委員（長野県学校保健会栄養教諭・学校栄養職員部会）

農産物マーケティング室より学校給食に農産物を使ってもらえるようにということで、いろいろ働きかけをしてくださり本当にありがとうございます。

我々としても地域食材をできるだけ多く使って、これからの長野県の未来を背負っていく子ども達に、農業の大切さ、旬のもの、地元のもののおいしさを知ってもらうということは非常に大切な教育の一つととらえております。またここでつながって、いろいろ進めさせていただければありがたいなと思います。

一人で食事を取っているという話ですが、やはり孤食になるほど朝食のバランスの良さというのが変わる傾向にあるというのが、本部会と保健厚生課と一緒に実施しておりますアンケート調査からも毎回出ております。その点で、本部会としても県下へできるだけ共食をしていきたいと思いますということで、働きかけをしております。

いろいろな立場で、そして保護者の方に一番理解いただいて、孤食の率が減ることを非常に願っております。

○宮澤副会長

まだデータが出ていない部分があると思いますので、集計結果がまとまったところで大至急お送りさせていただきます。その際にご意見がありましたら、また事務局へお寄せいただければと思っております。

（2）構成団体における取組について 資料2

【若い世代への食育】

○芳原委員（長野県小学校長会）

個人的な部分もありますが、子ども達が将来的に食べものを自分で何を食べたらいのか、どう食べたらいのかという選ぶ力、考える力をつけてほしいと思っております。

そのためには、小さいときからの経験が大事だと思います。小学校ですので、例えば今年、本校では2年生がにんじんをつくってしまして、土づくりを地域の方に教えてもらって、できたにんじんを生で食べて「甘いね」というのを経験したり、キャロットケーキを作ったりしました。

育てる、栽培する、料理をする、食べる、それから地域の方たちに感謝する。そういうことを通して、自分で選ぶ力というのを身につけていってほしいなと思います。

それから学校ですので給食を毎日いただいております。そこでの経験もすごく大切なん

じゃないかと思っています。給食センターの皆さんに来ていただいてお話をさせていただくこともありますし、学校でどんな献立だと喜んでもらえるかなと考えながら給食の献立を作ることもあります。

先ほど県産食材のお話がありましたが、先日、給食で塩いかときゅうりの和え物が出ました。これは1年生には無理じゃないかなと正直思っていました、とても食べやすく作ってくださったので1年生もパクパク食べていました。

それから市田柿が丸々出たときはだめでしたが、市田柿を切ってサラダに入れてくれると美味しいと食べてくれました。今月、市田柿のパンが出るそうです。それも楽しみです。県産食材を工夫して給食の献立に入れていただいているのがありがたいなと思います。

小さなうちから食べながら抵抗をなくし、おいしいねという経験を積むことが大切だと思います。

ただ一つ、気になるのが、やはり朝食欠食率のデータです。私も気になるお子さんや遅刻気味のお子さんが学校に来ると、「朝ごはん食べてきたの」と聞きますが、「食べてきたよ」というと、「お母さんがパンを置いておいてくれた」、「ごはんだけ炊いておいてくれた」等ありました。保護者の生活が夜の勤務だったりする方が結構いらっしゃって、子どもが出る時にお母さんは起きていない、お父さんは忙しいというのが結構あります。

朝ごはんは大事だということは保護者の皆さんも十分わかっていらっしゃいますが、それでもどうにもならない状況があるので、せめてこれだけはということを実践的に保護者の皆さんに提案するような研修があればいいのかなということを思います。

○篠原校長（長野県中学校長会 代理出席）

中学生の様子ということで、今の子ども達の健康な発達を考えると、お昼の時間の給食の果たす役割はとても大きいと感じています。

こういう時代ですので家庭環境はさまざまですが、先ほど県のほうの数字で欠食が5.1%とありましたが、私のイメージからすると、実態はもうちょっと高いのではないかなと思います。ただ、その欠食をしている理由は家庭環境にあるのか、中学生の生活リズムにあるのか、その辺りのところはわかりませんが、ただ先ほど芳原委員もおっしゃられたように、欠食をしている数字だけではなくて、実際に朝食をとっていると言っている子ども達のその中身を見た方がいいのではないかと感じております。ただ、ちょっと何かを口に入れてだけで朝食をとっていますと答えている生徒もいるのではないかと感じます。

中学生を見ていると、1日の学校生活の中で給食を楽しみにしている生徒は本当に多いです。それが家庭事情で食べてきていないからの行動なのか、または本当においしい給食だからなのか、というところについても見ていく必要があると思っています。

学校における食育は、そこに焦点を当てるといよりも、他の分野と横断的に考えている部分が多いのではないかと感じています。例えば感謝の気持ちや健康面、地域愛、学校給食で言えばルールを守る、そういったようなことをすべて踏まえながら、他の分野と融

合しながら実際の食育を扱っています。

また、私が今一番、学校現場にいて心配だなと思っているのは、子ども達のアレルギーの多さです。給食センターで、除去食を対応してもらったりしていますが、この数字もかなり上がってきていて、他の子と同じものを食べられないお子さんが増えてきているという実態があります。

各学校で多く取り組まれているのは、保護者の方たちを学校に呼んで、給食を一緒に食べる機会を設けています。家庭に帰ったときに食のことについて話題にできるいい機会にはなっているのではないかと思います。

私たちは食に関しては学校だけでなく、地域や家庭と一緒に考えていけたらと思っています。

○高嶋委員（長野県高等学校長会）

高校に入学すると給食から離れて、お弁当になり非常に環境が変わります。

給食からお弁当になる、または小・中学校のように近くの学校へ通うということではなくて、遠くから通ってくる生徒もおります。環境の変化があると、毎日の食事は一番大切になってくると思っています。

高校としましても、小・中学校で学んできた食育をさらに高めるという責務があると考えております。

高校での家庭科の授業では食生活による健康、または文化を学ぶということを中心に学習をしています。

家庭科だけではなく、健康の糧には食事、運動、休養・睡眠が大事になってきます。その辺りは保健体育で、または精神的な部分も非常に健康には関わってきますので、養護教諭やカウンセラー等を含めて、まず健康的な精神状態も一緒に教育しています。

本校は普通高校ではなく、専門高校です。特に食物栄養科という科がありますので、食に対するスペシャリストを教育しているという部分もあります。そのためスペシャリストに来ていただいて、郷土料理や味噌づくりなどを教えていただいたり、地域子ども達と一緒に健康について考える「けんこう未来食堂」というものも取り組んでいるところです。

いずれにしても、小・中学校のものを高めながら、主体的に生徒が健康に対して取り組めるように学習をしています。

○宮澤副会長

昨年も、小・中学校で学んできた食育が高校で切れてしまうのではないかと危惧されているご意見が出ました。

家庭についてですが、長野県の実態として100組結婚すると33組は離婚されるとあります。そういうことを踏まえて、私どもは家庭が変わっているということもよくよく頭に入れながら、この食育を考えていかなければならないと思います。

○大星委員（長野県学校保健会栄養教諭・学校栄養職員部会）

今年度の部会の取組としては、3年ごとに実施している悉皆調査に該当する年でした。現在、数字の確定を確認している最中で、結果は申し上げることは出来ませんが、先ほどから出ている数字と、それほど大きな差はないのではないかと思います。

当部会では、3つの重点課題として、①朝食欠食の習慣化に歯止めをかける、②朝食内容の充実、野菜摂取の増加を図る、③共食の啓発をしていく、に取り組んでいます。②については、朝食のバランスを見てみますと、副菜を取っている率がどうしても低い状態があるので、それも合わせて指導をしています。

次に小・中学校の食に関する指導の取組ですが、基本となる献立がその教材であり、この教材を使って食に関する指導にあたっています。先ほど篠原委員からもお話がありましたが、学級担任と栄養教諭がチームを組んで、教科や特別活動などで一緒に指導をしています。本校では2年生に大豆に関して指導をしましたが、一緒にやることで子ども達の関心がより高まり効果的な指導ができてよかったと思います。食農体験ということで、実際の農園でリンゴやブルーンの収穫体験をすることで、自然や生産者への感謝の心を育てるという取組も行っています。

また、世界的に活躍されているバドミントンの奥原希望選手にご協力をいただいて、部会オリジナルのポスターを作成し、各校に掲示しています。奥原選手のお母さまが私たちと同じ仕事をしているということでご協力いただきました。奥原選手が実践した3箇条、①朝食は必ず食べる、②夜10時には寝る、③好き嫌いはしない、これはやはり食の基本となる部分ですので、児童生徒に「有名選手にならなくても皆さんの活躍のためにはとても大事なこと」だとお話をしています。

他には、社会見学で学校給食センターに来ていただいたり、地域生産者を招いて交流給食を実施したりしています。本校では生産者だけでなく、地域でお世話になっている方々を招いての交流給食もあります。やはり子ども達と地域の方が触れ合う機会は大切ですし、生産者の方が給食を味わうことで、生産への意欲を高めていただける結果につながっていると感じます。

また先ほども出ましたが、保護者との親子給食や試食会も実施しています。家庭で教えていただきたいマナー、朝食のこととともに、長野県でも問題となっております食塩摂取量などについてもお話しして、家族皆が、元気で、ずっと健康で過ごして欲しいという話もして、ご家庭に持ち帰ってもらっています。

「栄養戦隊げんきレンジャー」という部会オリジナルのキャラクターも作成しています。これらを活用して家庭向けのお便りを作成し、子ども達も保護者の方も見やすく、関心を持ってもらうのに役立っています。

今後はさらに計画を推進し、各学年、発達段階に応じて、そして未来へとつながる食育を目指していきたいと思っております。

○伊藤委員（長野県PTA連合会 代理出席）

県内の各小学校の単位PTA内では、保護者向けの食育に関する講演会や研修会を行っております。

また、学級PTA活動として、保護者と子ども達とでおやき、やしょうまなどをつくって郷土料理を学ぶ活動をしています。

先ほど篠原委員もおっしゃいましたが、保護者の皆さんによっては給食センターに毎年訪問をして講義を受けて学校に戻り、子ども達と同じ給食を食べているというところもございます。講義で、野菜の調達や物流の面でも工夫されているということを知り、家庭でもそれを取り組みたいと思うところがございます。

また、皆様から大変厳しいご意見をいただいておりますが、学校や学校給食に頼るだけでなく、家庭から子ども達に食育に関することを教えて伝える必要があると思われました。

朝食の欠食や孤食（個食）の問題についても、今後県の皆様、そして関係機関の皆様の知恵をお借りしながら保護者、PTAも取り組んでいきたいと思っております。

最後になりますが、確かに食育というのは栄養が一番ですが、保護者、家庭としては、一緒にご飯を食べたり、一緒に料理をつくるのが家族としてのコミュニケーションの大事なスキルにもなっておりますので、そういった心の栄養も食育の教育として、PTAは取り組んでいければと思います。

○坂口委員（長野県学校給食会）

名前のとおり学校給食の食材を提供させていただいております公益社団法人として、小麦粉、パン、ご飯の米等の主食や、一般物資として約3,000品目扱っております。乾物、缶詰、冷凍食品、練り製品、調味料が非常に多く注文をいただいております。

ただ、民間業者の参入や子どもの数が減ってきておりますので、給食会としても非常にやりくりが大変です。特に長野県全体を網羅して配達しておりますので、中山間地、へき地から醤油1本ほしいといえ、朝5時に出て配達しているという状況もございます。

現場の栄養士の先生方のニーズをより広く把握しながら、安心・安全な食材を提供していきたい、そしてそれが子ども達のそれぞれの成長につながっていければいいと願いながら、日々努力しているところでございます。

○北村委員（全日本司厨士協会長野県本部）

司厨士協会は聞きなれない言葉だと思いますが、長野のホテルやレストランのコックの集まりです。

一番大きな食育の取組としては、味覚の授業を毎年10月頃に行っています。今年は千曲市立更科小学校へ行ってきました。一度に多くの生徒へ授業を行いたいのですが、当日職場を休める人が限られておりますので、毎年少しながらも広げていければと思います。

○宮澤副会長

「若い世代への食育」について、それぞれお話をいただきました。

芳原委員のお話にもあったように食べるものを選ぶ力を身に付けていただくことなど、子どもの頃からの食育が大切であると、先日知事とも話をしたところです。

その中で、栄養教諭の皆さんの重要性が高まってきていると思いますが、充足率は何%か事務局でわかりますか。

○事務局（保健厚生課）

県では栄養教諭を130人程配置しております。国の配置基準に基づいて、県費学校栄養職員も含めて、生徒の人数によっては2校に1人というような配置をしている状況で、すべての学校に配置できていない状況です。

ただこの他、市町村で単独配置されているところもありますが、人数というのはこちらでは把握できておりません。

○鶴岡委員（関東農政局）

国も第4次食育推進基本計画の策定が動き始め、1月の第1回食育専門推進委員会で、栄養教諭の話が出ましたので補足させてください。

今、食育が浸透しているか浸透していないかの一番のポイントは栄養教諭の有無だそうです。栄養教諭がいる学校というのは、子ども達がりんごの皮をむくことが平気のできる場所が多いのですが、いないところはそういうことが全然進まない、あるいは食育の話が全然進まないというところがありました。国としても、今後一層の栄養教諭の配置を促進するということになりましたので、情報提供いたします。

○宮澤副会長

鶴岡委員がおっしゃられたように、栄養教諭の皆さんのご努力が非常に評価されているわけです。学校の先生方は小学5年生から英語教育も始まるなど忙しい中であって、栄養教諭がしっかりフォローしてくれているという面で、栄養教諭の置かれている位置は高い。今日は市町村の代表もおいでになりますので、単なる食育だけの問題ではないということも含めて、よろしくどうぞお願い申し上げたいと思います。

【世界一の健康長寿を目指す食育】

○中村委員（長野県歯科医師会）

私ども歯科というのは、食あるいは栄養ということに関して非常に関わりが深い職種であると認識しています。

厚生労働省の予算において、昨年の12月に大臣折衝があったようですが、厚生労働省全体としては3%増という中で、歯科の関連する事業に関しては40%増というような数字が出ております。それだけやはり期待も大きいとされているところです。

歯科医師会としては、ライフステージにおいてそれぞれの世代に食べること、栄養をしっかりとることが健康につながると思っております。特に高齢者においては、健康長寿につながるお口の大切さをしっかりと啓発していかなければならないと考えております。

県単位だけでなく、長野県では地方会が20郡市あります。それぞれやはり地域の特性に合った形でそれぞれの活動も行っているところです。

健康長寿に関しましては信州ACEプロジェクトを県で進めているようですが、ここでもやはり大事になるのが栄養だと思います。それがフレイルの出発点であり、口の衰えから機能的に低栄養に陥っているということで、なんとかしていきたいと歯科医師会としてももしっかり取り組んでいきたいと考えております。

やはり歯科だけでは、こういった大きな問題というのはクリアできないと思われ、栄養士会さんとも懇談会も先日行い、さまざまな職種で協力してこの問題に取り組んでいかなければならないと思っております。来年度の事業においてもそういった取組を盛り込んでいるところでございます。

○廣田委員（長野県栄養士会）

ライフステージごとに、それぞれの課題があると考えております。生まれてから亡くなるまで、口からきちんとした必要なものを摂取するという事は常に行わなければいけないことですので、私たち栄養士会としましてはすべてのライフステージに関わって、その課題を確認しながら評価しながら、それに対応するような事業を進めて、食育推進をしております。

8月4日が栄養の日ということで、キャンペーンをするようになりました。その時期にあわせて、「野菜たっぷり適塩キャンペーン」というものを広くスーパーマーケット等で県民の皆様を意識していただくような働きかけをしてみました。

次年度は少し方向を変えフレイル対策のことも含めて、低栄養への意識づけも含めて、少し視野を広げて取り組むことになっております。

「食からパワーアップ高校生のための食育出前講座」を行っております。高校生は大学生等になって自立していくときに、最後の食をきちんと学ぶようなことができる年代と考えておまして、栄養士会の出前講座として実施しております。年間10校くらい承ればということで予算建てをしており、各高校にご案内をしています。ご利用いただければありがたいと思っております。

本年度の事業として、お財布にやさしいレシピ集の作成を若い世代を対象として実施しております。県の健康増進課にも相談させていただきまして、適切なアドバイスをいただきながら、長野県の地域発元気づくり支援金を活用させていただいています。現在、でき

るだけ簡単に高校生が作ることができてお財布にやさしいというコンセプトで、レシピ集を作成しているところです。本日お配りできないのが残念ですが、次回はお示しできると考えています。レシピ集を用意して大学生、高校生の講座等に活用していくことも考えておりますので、お願いしたいということがございましたらご連絡いただければと思います。

次年度はフレイル対策を視野に入れて、ご家庭で高齢者の栄養対策になるようなレシピ集の作成を計画しています。各ライフステージの課題解決に向けて、いろいろな取組を検討させていただき、取り組んでまいります。

○宮澤副会長

歯科、口腔については研究が進んでおられまして、例えば信州大学の口腔外科と大町市にある高齢者施設とで、施設利用者の皆さんにお口のチェックを実施したところ、その施設からは肺炎で亡くなる方が一人もいなくなったそうでございます。

健康長寿のためには食やお口の健康が大切でして、歯科医師会の皆さんには非常に大きな研究をしていただいて感謝を申し上げたいと思っております。

また、廣田委員の個人的なご研究でもございますけれども、男性長寿日本一になりました松川村の長寿の要因を調べるということでプロジェクトを組まれまして、さまざまな研究を展開されておられました。さまざまな分野から多角的に分析をしていくということはとても素晴らしいことだと思ひまして、先生方にもお出かけいただいてこういったご講演をいただく中で、知の伝承を図っていければありがたいなと願うところです。

○石原委員（長野県町村会）

ライフステージごとの取組について資料に記載させていただいています。3項目めに記載している通いの場合は、介護保健事業にあたる生活支援体制整備事業の一環です。軽井沢町16地区でこの通いの場合は設定されており、町に在籍する管理栄養士によりフレイルや低栄養予防についての講演を行っております。1月末現在で8回実施しております。

その他、各保健福祉事業におきまして、保健指導を通して個々の健康に沿った食の知識の普及等を行っているところです。

また小学校、中学校、保育園、幼稚園関係では、各学年それぞれのライフステージに応じた教育現場での食育推進を図っているところです。

軽井沢町では、食育推進計画を健康増進計画と一体的に作成しております。食育を推進する中で、やはり健康寿命延伸を捉えた中での計画となっているわけですが、今後は、特に高齢期世代の方々に対する施策について、力を入れていきたいと考えています。

なお来年度は、町健康増進計画の中間評価の年になります。5年間の検証をしっかりと、ライフステージごとに漏れのないような計画の見直しを行いまして、それぞれの年代層に応じた食育の推進に取り組んでいきたいと考えています。

○宮澤副会長

それぞれ市町村の取組からスタートをいたすというのが一番の基本であります。ぜひともいい形でそれぞれご展開いただければ、それに対して、関係者の皆さんや県の皆さんのご協力をお願いしたいと思います。

【食の循環と地域の食を意識した食育】

○湯本委員（長野県調理師会）

「しなの食大学」では県産食材を使ったり無駄を出さないようにしたりしています。食材の無駄を出さないよう、実行できることをみんなで議論していかなければならないと思っています。

小学校の食育にも行かせていただきました。その中で、子どもの食べたいものを作るということも大切ですが、やはり食べたくないものも食べてみることで、同じ野菜でも部位ごとに味が違うということやそれぞれの部位のおいしい調理法を知ってもらえるので食育には大事だと思っています。

学校に行って、食事時間に子ども達がどんな話をするかにも興味があつて一緒に食べました。時間が限られているからかもしれませんが、もくもくと食べていました。作った側とすれば「これはどんな材料で～」といったような食事するときの会話も大事だと思っています。これは学校よりも家庭の食事が大事だと思っています。食事のときにおばあちゃんの話の聞くとか、お母さんが忙しいときにやりくりして食事を作る姿を見るとか、そういったことも食育につながっていくと思います。

また、春先に苦いものを食べなければ夏の一步手前で体の調子が狂うとか、昔の人が自然から学んで体で覚えていたようなことを短い文章でわかりやすくまとめた冊子なども作れたらいいなと考えております。

○小林委員（長野県農業会議）

長野県農業会議というのは、市町村に設置されている農業委員会をサポートするための組織になっています。農業委員会は、農地をよりよく生かしていくというようなことのために、農業委員さん等からご意見をいただいているところです。

食育は、中長期的に農業を地域の方に理解していただくために大切だと思っています。食文化に親しんでもらって地域の農業を理解してもらうということが農地を守っていくことにもつながるということで、いろいろ取り組んでおります。

1月に女性の農業委員さんを集めた研修会では、食育を進めるにはどうしたらいいかというようなことを分科会のテーマにして開催しました。

令和2年度の取組としては、遊休農地の活用を兼ねた子ども達の収穫体験などを市町村

農業委員会に働きかけて引き続き行っていきたいと思います。

○福島委員（長野県農業協同組合中央会 代理出席）

J A長野県グループは農業団体でございますので、地域の小中学校と連携して、農業体験といったような形で、食育も絡めて活動しているところが多いです。J Aの営農指導員による指導のもとで、田んぼでの田植えから稲刈りまで年間を通して行う稲作体験等の農業体験、地域特産の農産物を使ったもので調理をするなどの体験を行っております。

J Aの職員だけでなく、地域の女性部、地域住民の皆さんを交えつつ、料理教室や学習会などが行われております。また青年部は比較的若年層の農業者の組織ですが、青年部の皆さんにおいても、地域の子供達に向けた農業体験などの活動も積極的に行われております。

このようにJ A本体に限らず、組合組織でも食育にかかわる活動が行われております。今後もみんなと一緒に農作業をして食べものの収穫を体験したり、季節の地域の食材の料理を味わったりするなど、農業と食育の実践に積極的に取組を図っていく所存でございます。

○相澤委員（長野県農村文化協会）

令和元年度としては、信州の風土を活かした和食をどうやって伝えていくのかということで、主に小・中、高校との連携した活動と、自治公民館の講座でどういう形でやれるかということに重点を置いて活動させていただきました。

信州ひらがな料理普及隊というのをつくり食育を進めています。和食、一汁一菜、一汁三菜をどうやって伝えたらいいか、ハレの食は割と伝わっていますが、ケの食・日常食をどうやって伝えたらいいかということで活動をしてきました。伝え方がなかなかわからないということもありましたが、昨年度、県の元気づくり支援金の事業を採択していただきまして、食育の4つの意味をまとめたパンフレットを小学生版、中学生版、高校・一般版という形で作らせてもらいました。それができたおかげで、対象ごとにどういう形で具体的に伝えられるかということ、今年度は一歩ずつ進めることができました。

第2版として指導者用のテキストの改訂版を作成しました。おかげ様で優良事例ということで、今年度「長野地域振興局長賞」をいただきました。それを励みに頑張っていきたいと思います。

昨年度は箱膳を使った食育を計80回行い、1,840人の参加がありました。今年度はさらにそれを上回る形で取り組むことができおり、本当に感謝しております。

継続して取り組む小・中学校、高校、公民館が増えてきていますし、子ども食堂等にも広がっております。ミズーリ州立大学のコロンビア校が箱膳体験や和食に興味を持っていただき交流が深まっており、いろいろな新しい視察団体も増えてきています。

そこで今年度と来年度に向けては、教科学習と食育をどうやって関連づけるのかという

ことで、4時間目の授業とお昼の時間を組み合わせてやらせてもらいました。4つの意味のパンフレットの説明をし、子ども達にわかる形で伝えることができました。

それとあわせて、子ども達にマナー等を総合的に伝えていかなければいけないということもありまして、そこをこの箱膳という昔のお膳を使いながら実施しました。箱膳を使うことで子ども達が熱心に聞いてくれるため、ツールとして使わせてもらっています。

また、ご飯を食べたときに、今食べた一杯には稲3株分くらいが入っているという話をすると、5年生は田植えを経験しているのですぐイメージができて、ご飯のとらえ方も違ってきます。命を感じる学びであるためには、そうやって具体的に伝えることが重要だと思います。

先日高校でも箱膳体験をさせてもらったのですが、意外と素直に受け入れてくれました。はじめは、ご飯、味噌汁、主菜、副菜の置き方がバラバラでしたが、ただ知らなかったというだけで、意味を説明するとスッと理解してくれました。

このような具体的に伝えていける形のものを来年度も引き続き続けていきたいなと思っています。

○三沢委員（農村女性ネットワークながの）

令和元年度の取組として、信州の味コンクールの開催をし、コンクールへの参加者及び県民が特色ある地域食材や郷土料理の良さを見直し、健康長寿につながる食生活等について考える機会となりました。応募総数は27件ありました。

信州の食と農のセミナーの開催を県下6地区で行いました。一般消費者を対象に農業の生産活動と地域の農産物、特産物を活用した料理講習、加工講習を通し、積極的に地域農産物を活用してもらうとともに、食や農に関する理解を深め、農業の応援団になってもらうことを目的としております。

牛乳・乳製品利用料理講習会の開催を県下6地区で行いました。一般消費者を対象に、栄養のバランスをよく、カルシウムを多く含んだ牛乳、乳製品を利用した料理講習会を実施することにより牛乳、乳製品料理を普及し、国産牛乳、乳製品の需要の拡大を図ることを目的としております。

学校給食への食材の提供、直売、イベントへの出店協力等による地産地消の推進、農業体験や食文化の伝承等による子どもや消費者への食農教育の実践、またお蚕様を飼ったりして命の大切さを気づいてもらっております。

令和2年度の取組として、引き続き新長野県農村女性チャレンジプラン基本方向、食を初めとする農村文化の魅力の共有と発信の会、重点活動事項として取り組んでいきます。

【信州の食を育む環境づくり】

○宮澤副会長

地産地消や食文化の伝承についてですが、現在国でも一番大きな問題は事業継承であるとされております。

黒字倒産というものがあるそうで、りんご生産で儲かっていたとしても、後を継ぐ人がいなくなってしまうとのこと。外から来た人たちに農業の体験を実施するということはしていても、自分の地域の子供も達はやっておらず、自分がバトンタッチする人たちが農業をやったことがないという問題が出てきてしまいます。事業継承は大変な問題です。外国人にまで事業継承を広げていかなければ、困る時代になってきています。そういう時代に入っているということを見直さなければならぬと思っています。

○梅沢委員（長野県食品衛生協会）

食品事業者が集まった団体で、特に食品衛生の向上、食中毒の防止というようなことで活動をしています。

家庭での食事等の話がありましたが、外食というのも非常に生活の中では重要だというふうに思っております。外食産業を中心として、安全・安心な食品を提供したいということで取り組んでいます。

特にその中で、本年6月に施行されますが、食品の安全を図る手段としてHACCP（ハサップ）という衛生管理を取り入れるようになります。世界的にもこの手法が取り入れられており、日本もそれに沿って取り組んでいくということになります。

私どもは、このHACCPがスムーズに事業者の皆さんに取り入れられるよう、特に小規模の製造業者、飲食店等を中心に、今年度さらに講習会等で普及を図っていくことをしております。こうしたことをしながら、消費者の皆さんに安全・安心な食品の提供をしたいと考えております。

今、コロナウイルス等が問題になっていますが、私ども協会独自で手洗いマイスターの認定講習会ということをやっています。これは会員の中から正しい手洗いの指導を行える方を養成している事業です。ちょうど今年度末で、大体200名ぐらいの方がこの認定講習会を受けております。地域で、小さい頃から正しい手洗いを知っていただくためのご指導もできますので、そういったご要望があれば、お知らせいただければと思っておりますので、よろしくお願いをしたいと思います。

○関委員（長野県生活協同組合連合会）

生協は現在20の会員生協、生協連合会に入っただいており、共に活動を進めています。生協は組合員に加入して商品やサービスを利用するメンバーシップですが、地域生協だけを取っても現在の県民の世帯比率では約4割の世帯の方が生協に加入していただい

いますので、組合員の困りごとや課題はそのまま地域社会の困りごとであるという認識で、生協の事業を通じて、いかに地域社会の問題の解決に貢献するかという視点で各種取組を進めているところであります。

長野県もSDGs未来都市宣言をされておられますが、それを受けて連合会の立場としては、ゴール17のパートナーシップで目標達成という部分を最も重視して事業を進めています。その成果の一つが「信州まるごと健康チャレンジ」です。この取組は、県内の各協同組合と連携したものでして、信州ACEプロジェクトに協賛した中身でもあります。9つあるチャレンジ項目の中から自分が実践する項目を1つ以上決め、3か月間実践し、その実践状況を自分でチェックしていく取組です。9つのチャレンジ項目の1つにバランスのよい食事が入っています。これは各団体で個別にやっていたころは数千、数万の単位でしたが、全体で同じものを作りあげて連携して配布したことで、約66万部にまで配布が増えました。現状は情報誌の役割が非常に大きく、配布することに意味があると考えていますが、この取組は今後も中身を磨き上げながら続けてまいりたいと考えております。

また、大学生協食堂で食育ランチの提供を実施しています。食育ランチでは、バランスが取れていること、県産食材を使うこと、大学生協食堂のオペレーションで食事提供が可能であること、そして価格に配慮しています。栄養士会にご協力いただいたり、JAのメンバーをはじめ、各企業、団体の皆さんに協賛をいただいたりして、大学生の皆さんに安くてバランスのとれたおいしい食事の提供を進めております。今回、秋にシャインマスカットを3粒か4粒ぐらい、デザートで付けたところ、県外出身の学生は初めて食べたというのが圧倒的多数で、「シャインマスカットはこんなにおいしいのか」という声も聞かれて、県産食材のPRにも多少なったのかなと考えております。

食の問題やよりよい地域社会づくりに貢献しようという志をお持ちの団体企業や、行政の皆さんと連携をして、引き続きさまざまな形で地域社会に貢献したいと進めておりますので、今後ともよろしく願いいたします。

○海野委員（長野県消費者の会連絡会）

賢い消費者になりましょうというエシカル消費の取組の一環としまして、食に関する研修をしております。

昨年ミールケアへ視察研修でまいりまして、その後に先日の台風19号で被災をされたということで、皆さんと心を痛めております。地産地消や自社農場で地元のものを使ってご努力いただいているところが被災されたことはすごく心が痛いことで、早く元のように活気づいた取組をしていただければと思っております。

また、添加物を使っていなかったり、地元のものを使っていたりするような工場の見学などを行い、安全で安心な食べ物への取組を少しでも学べたらいいと思って常に行動をしております。

私が所属している他の団体では、小学校や郷土料理クラブのお料理教室のお手伝いもし

ております。安心・安全なものを子ども達にも提供し、旬を感じてもらえる食材で料理して、知っていただけたらいいかなと思います。

今日は皆さんの熱い思いをお聞きして、これでまた会へ戻りまして、会員の皆さんにお伝えしたいと思います。

○宮澤副会長

食の安全、食の循環、食べ残し等々、さまざまな問題があります。

最後に、関東農政局の鶴岡委員から、国の動き等も踏まえてご発言をお願いいたします。

○鶴岡委員（関東農政局）

国としては第3次食育推進基本計画に基づいて取組を進めており、詳しくは資料9ページをご覧くださいと思います。その中でひとつ情報提供させていただきますと、2月21日に、「令和の時代における食育～身近なところからはじめようSDGs～」というテーマで、自治体、企業、生産者、学生、いろいろな方にお集まりいただき、交流会、パネルディスカッション、グループディスカッションをする予定です。

先ほどから宮澤副会長がおっしゃっていますが、ものすごいスピードで時代が変化しています。経済学者によると、今の時代の変化は明治維新に匹敵するぐらいのスピードで動いているとのこと。

また、ものすごい勢いで少子高齢化が進んでおり、現在は人口が年間40万人減っていて、あと数年もすると80万人が毎年減り続けるとされています。この80万人というのがどのくらいの数かというと山梨県の人口に匹敵します。生産人口も現在60%しかないものがさらに減少します。外国人労働者も一緒に食育をやっていかなければいけないし、子どもだけ、家庭だけでやるのでは無く、オールジャパンで食育をやっていかなければいけない時代が来ています。

これだけスマホや小・中学生がパソコンを頼りにする時代になってくると、情報提供は紙ベースではないのではということが、現在4次計画の策定に向けて議論されています。ツイッターなどのSNSを使い、確実に見てくれるツールを使って発信していくことが求められていますので、情報発信の手法についてもぜひ論じたいと思っています。また、働き方改革、ワークライフバランスといわれておりますが、国として男性の家事参加というのを積極的に進めています。今年までに男性が1日に150分家事をしようという目標がある中で、まだ80分程度となっていますので、男性の家事参加もお願いしたいと思います。

また、食品ロスについては2030年までに半減しようという国の決まりがありますがなかなか進んでいません。農水省で食品ロスに関する調査を行いました。家庭で出る食品ロスのほとんどが過剰除去や失敗して捨ててしまう等、スキルがないことが原因でした。

SDGsだからといって特別なことをやるのではなく、調理体験を進めながらSDGs的な視点に置きかえてもらえば、新しい食育の取組になるのかと思います。2月21日に東

京家政大学でこれから10年後、20年後にどういう食育をやったらいいのかということのみんなで語り合いたいと思いますので、参加をお待ちしております。

○宮澤副会長

鶴岡委員がお話されたような大きく世の中が変わろうとしているということ、気づかれていない方が多いように感じます。先ほども小・中学校にパソコンが供与されるというのが話をしましたが、子ども達がゲームをやるためにスマホ・パソコンを使うのではなくて、情報を集めたり、発信をしたりするために使う時代になっています。

皆さんとても熱意があつて、原点や目指す方向は変わっていないのですが、その手法が大きく変わってきているということを考えなければなりません。

(3) 長野県における食育関連事業について **資料3**

○宮澤副会長

最後に、時間も限られておりますので、県から配布資料について補足等があれば、それを皆さんにお伝えして、ここを閉じさせていただきたいと思います。

保健厚生課：**資料4**について説明

健康増進課：フレイルに関するリーフレットの作成及び**資料5**について説明

農産物マーケティング室：高校生によるおいしい信州フードを活用した朝食メニュー開発の取組について説明

○宮澤副会長

最後になります。何かございましたらお話しいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

○鶴岡委員（関東農政局）

市町村食育推進計画の策定率は、長野県は約70%で、全国は84%、関東農政局管内では89%です。関東農政局管内の茨城県、栃木県、群馬県、神奈川県、静岡県は策定率100%、残りの県も9割ほどです。

埼玉県はここ数年で策定率が60%から90%台に上がりましたが、私たちも一緒になってワークショップ等を実施してきており、共有できるノウハウがありますので、一緒に取り組んでいきたいと思っています。ご検討をよろしく申し上げます。

○宮澤副会長

新しいことに積極的に取り組んでいかなければということを他県の事例を検証する中で私も感じています。皆様方もここでもう一度考えて、新しい工夫をもって進めていただければと願うところです。

食育について学ぶ機会をもっと増やしていければと思います。皆様に講師をお願いすることもあろうかと思いますが、そのときは快くお受けいただけるようお願いいたします。

私からは以上とさせていただきます。本日はありがとうございました。

○事務局（原健康増進課長）

本日は宮沢副会長を初め、委員の皆様には大変お忙しい中、ご出席をいただきまして大変ありがとうございました。

長野県食育推進計画（第3次）がスタートいたしまして2年目となりますが、本日の皆様のお話をお伺いしまして、それぞれのお立場でご尽力をいただいていること、また取組が広がっていることを実感しました。

県といたしましても皆様からのお話を受けとめ、一層、食育の推進に努めてまいりたいと考えております。また皆様には今後とも、長野県の食に関する取組をお互いに協力、連携しながら推進していただくようお願いを申し上げます、御礼の言葉とさせていただきます。どうもありがとうございました。

4 閉会